

バードリサーチ ニュース

2010年2月号 Vol.7 No.2

Anser caerulescens
Photo by Abe Seichi

活動報告

バードリサーチが行なっている 鳥のモニタリング調査

植田 睦之

現在、鳥の減少あるいは逆に個体数の回復/増加した鳥による被害問題、温暖化による生態系の変化の可能性等、様々な問題が生じています。こうした問題の現状を明らかにし、適切な対策をたて、その効果を測るために、各種鳥類の生息状況を把握し、変化を見守っていくことが必要となっています。何度かニュースレターでも紹介していますが、欧米ではBTO等の団体が鳥類のモニタリングを行なっていて、それが保全計画等に活かされています。

日本では、各地で研究者やバードウォッチャーがモニタリングをしているものの、それを集約できるような全国的な団体がありませんでした。そこで、そんな団体をつくりたいとバードリサーチを設立しました。環境省が行なっているモニタリングサイト1000事業(以下、モニ1000)でも鳥の調査の大部分にバードリサーチが関係するようになり、また先日鳥学会が開いたモニタリングシンポジウムでも、バードリサーチが関係する発表が多くを占めるなど、設立5年目にして、この分野で中心的な役割をはたせるまでになってきたかなと思います。とはいってもまだ体系的に経年変化の情報を得られるまでにはなっておらず、これからさらに発展させていかなければなりません。調査メニューも増えてきましたので、ここで現時点のバードリサーチのモニタリング関係の調査について整理してご紹介したいと思います。

バードリサーチ鳥類モニタリングプロジェクト

生息状況のモニタリング

森林 干潟 水域 環境省モニタリングサイト 1000
都市 ベランダバードウォッチ
全般 野鳥データベースプロジェクト
種別 冬鳥ウォッチ カワウプロジェクト(ねぐら調査) コサギ調査
ヒクイナ調査 ツバメかんさつ全国ネットワーク ミヤマガラス調査

生物季節のモニタリング

飛来時期等 季節前線ウォッチ 飛来状況調査(ガンカモ)
キビタキ調査 ミヤマガラス調査
繁殖時期 モニタリングサイト 1000(自動録音調査)

繁殖成績・死亡率のモニタリング
カワウプロジェクト
(コロニー調査 成鳥幼鳥比調査)

生息環境・食物のモニタリング
シギチドリ調査(底生生物調査)
飛翔性昆虫ウォッチ

生息状況のモニタリング

モニタリングの基礎は生息状況の変化を見守っていくことです。2004年からは環境省がモニ1000を開始し、主要な環境について、国がモニタリングを行なう体制が整ってきました。しかし、最も人の影響を受け、大きく変化しそうな人の居住地周辺の環境はモニタリングされておらず、独自調査の「ベランダバードウォッチ」などでカバーしています。また農地環境についてはモニ1000の里地調査で一部がカバーされているだけでまだ不十分です。こうした場所の鳥のモニタリングが今後の課題です。種別のモニタリングは、現在変化の大きい種を中心に実施しています。来たる繁殖期からは移入種についてもモニタリングもはじめようと考えており、近々内容をお知らせしたいと思います。

生物季節のモニタリング

温暖化の問題がよく話題に出ます。国外では、温暖化に対する反応が各動植物で違うことにより、食物の豊富な時期と鳥の繁殖時期がずれてしまい、そのギャップが鳥に影響を及ぼしていることが明らかにされています。日本では新潟の小池さんらによるコムクドリの研究がありますが、それ以外はほとんどわかっていません。「季節前線ウォッチ」などの調査で各種鳥類の全国的な状況を調べるとともに、自動録音装置などを活用して、そのような季節のギャップが日本の鳥でも生じているかどうかについて明らかにしていきたいと考えています。

モニタリングを拡げるために

広域で鳥のモニタリングを行なうためには、多くの方に参加いただかなければなりません。そこで、誰でもできる「季節前線ウォッチ」や「ツバメかんさつ全国ネットワーク」のような調査から、少し識別ができれば参加できる「ベランダバードウォッチ」、そしてその他のモニタリング調査などさまざまな調査をそろえて、興味を持った人が参加できるような体制を考えています。また、調査講習会や調査員集会も開催しています。調査方法は講習会で伝えることはできません。識別方法までは、数日のミーティングでは伝えることができません。みにクルなどの参加型の調査イベントもしていますが、このあたりを伝える方法が今後の課題です。今後も新しい調査をたくさん始めていきたいと思っています。皆さんの力無しには広域のモニタリングを行なっていくことはできません。ぜひ調査への参加をお願いいたします。

海外情報

巣箱を使った調査 in イギリス

本山 裕樹

British Trust for Ornithology (BTO)は、鳥類の保護を目的として科学的な調査・研究を行っているイギリスの団体です。多数のボランティア調査員と専門家によって、広範囲にわたって様々な調査・研究を行っています。今回はBTOの活動の中から、「Nest Box Challenge」という巣箱を利用した調査をご紹介します。

Nest Box Challenge

Nest Box Challenge はBTOとBBC(英国放送協会)の共同事業です。ボランティア調査員がかけた鳥の巣箱をBTOのデータベースに登録してもらい、それをもとにイギリス全土で繁殖成功率などを調べています。調査は2007年の冬から夏にかけて毎年実施されていて、現在の調査員数は累計で約9000人、約20,000個もの巣箱が登録されているそうです。また、現在までに60種以上の鳥が巣箱を利用するのが確認されているようです。



図1. 巣箱が設置されている151地区の位置図。BTOのホームページより。

調査方法

ボランティア調査員は、繁殖期の前に巣箱をかけ、巣箱の場所などの情報をBTOのデータベースに登録します。春になり繁殖期が始まったら、ボランティア調査員は、攪乱させないように注意しながら定期的に巣箱の中をのぞいて繁殖段階を観察します。巣箱の中をうかがう鳥や、ねぐら利用、巣作り、卵、ヒナなどが確認されたら、インターネットを使ってデータベース上の自分の巣箱の情報を更新するといった仕組みになっています。

イギリスで巣箱利用の多い種は？

日本では都市部の巣箱に入るのは、シジュウカラやスズメが多いですが、イギリスでは、いったいどんな鳥が巣箱を利用しているのでしょうか。今回は、BTOの2008年のニューズレターから調査結果をみてみました。



図2. 巣箱利用1位のアオガラ。 [Photo by carnagevisors]

2008年の登録巣箱数は約17,000個でした。そ

の中で、巣箱で繁殖した鳥の上位10種で1229巣。1位のアオガラと2位のシジュウカラで985巣を占めています。それに比べて、イエスズメとスズメは両方合わせても115巣と少なく、ヨーロッパコマドリが4位に入っていました。このほか、モリフクロウやアカゲラ、キセキレイ、ウタツグミ、コクマルガラスなどの繁殖も確認されています。

2008年のBEST10

1位: アオガラ	696巣	6位: ホシムクドリ	18巣
2位: シジュウカラ	289巣	7位: クロウタドリ	13巣
3位: イエスズメ	81巣	8位: ミソサザイ	9巣
4位: ヨーロッパコマドリ	75巣	9位: ゴジュウカラ	8巣
5位: スズメ	34巣	10位: ヒガラ	6巣

初卵日と卵の数とヒナの数

この調査では鳥の繁殖開始時期や繁殖成功率をモニタリングすることができます。2007年と2008年の調査結果から初卵日、卵の数、ヒナの数の平均をアオガラ、シジュウカラ、ヨーロッパコマドリの3種についてみてみました(表)。2007年は春暖かくなるのが早かったため、アオガラの初卵日は2008年とくらべて5日も早かったそうです。しかし、シジュウカラとコマドリに同じ傾向はみられませんでしたし、一腹卵数と孵化雛数は3種とも2年で大きな違いは見られません。暖かくなるのが早くても、繁殖には関係しなかったようです。また、都市部のアオガラは田舎のものよりも初卵日がかかなり早い傾向にあったそうです。田舎にくらべて都市部は暖かかったり、人が庭にエサを置くことが関係しているのかもしれない。

表. 2007年と2008年の初卵日と一腹卵数と孵化雛数の平均。

種	年	初卵日	一腹卵数	孵化雛数
アオガラ	2007	4/17	8.5 卵	6.3 羽
	2008	4/22	8.6 卵	6.4 羽
シジュウカラ	2007	4/23	6.3 卵	5.6 羽
	2008	4/21	7.0 卵	5.1 羽
ヨーロッパコマドリ	2007	4/10	4.5 卵	3.5 羽
	2008	4/12	4.2 卵	3.5 羽

イギリスではイエスズメが、食物や巣をつくる場所が減ったことによって、生息数が減少していると言われています。巣箱を利用するほかの鳥でも、こうした変化が起きるかもしれません。巣箱の調査は開始されてからまだ2年しか経っていませんが継続することによって、ラインセンサスなどの目視調査ではわからない繁殖状況の経年変化をモニタリングすることができる方法だと思います。

BTOのホームページでは、調査結果の一部をだれでも検索して閲覧できるようになっています。閲覧できる調査結果は151の地区ごとに集計されたものだけですが、どの鳥が巣箱を利用したか、ヒナが確認された巣箱はあったか、卵が確認された巣箱はあったか、といった情報が地図上に表示されるので、ぜひ一度ご覧ください。

■Nest Box Challenge の調査結果検索ページ
<http://www.bto.org/nbc/results/index.htm>

参加報告

日本白鳥の会研修会に参加しました！

1月23～24日に山形県酒田市で開かれた日本白鳥の会研修会に参加してきました。白鳥の会は1973年に設立された団体で、今年の集会在38回目になるそうです。研修会では各地のハクチョウ飛来地で観察を続けている皆さんから、餌付け中止による影響やガンカモー査調査と独自調査の個体数の不一致などの報告が行われましたが、なかでも草津湖岸コハクチョウを愛する会の吉岡美佐子さんの発表は印象に残りました。

琵琶湖に飛来するコハクチョウの多くは北部地域に生息しているのですが、南部の草津にも少数が飛来します。その数は琵琶湖の水位と関連して



写真. 現地研修で訪れた最上川スワンパーク。

いて、水位が高い年はコハクチョウが水中の水草に届かないため飛来数が少なく、逆に水位の低い年は飛来数が多くなるそうです。ここ数年は水位が高かったことや、ねぐらのそばでヨシ帯造成工事が行われたことなどから、2008/09年の飛来数は2001/02年以降では最も少なく、多い時でも約20羽しか観察されなかったということです。草津湖岸コハクチョウを愛する会では、草津で観察されるすべてのコハクチョウをくちばしの黄色い部分のパターンで個体識別して記録しているほか、外来種のボタンウキクサの除去や、コハクチョウに絡まる釣り糸ゴミの清掃など、生息地保全のために精力的な活動をされています。

さて、バードリサーチでは日本白鳥の会が1974年から各地で行っている毎月の定点カウントの記録をお借りして、ハクチョウ類の経年変化や季節変化を解析することになりました。結果はまたご報告いたしますので、どうぞご期待下さい。【神山和夫】

研究誌紹介

Accipiter ~日本野鳥の会栃木県支部研究報告~ 15巻

日本野鳥の会栃木県支部発行 定価 1200円(税別)+送料

日本野鳥の会栃木県支部が毎年出している研究報告を今年も寄贈していただきました。15巻には農作業がケリの繁殖に与える影響や、鬼怒川における長期調査による出現種の変化、トラフズク標識個体の観察記録など7本の論文と報告が掲載されています。トラフズクの標識についての報告は、金属足環で8ケタの番号が刻印されていますが、デジスコで写真に撮影することで、そのうちの6ケタ

を読み取り、個体を特定し、標識地や標識年がわかったというものです。こうした方法で標識個体の観察例が増えていくかもしれませんね。【高木憲太郎】

全論文のタイトルと内容については、日本野鳥の会栃木県支部のホームページをご覧ください。

<http://homepage3.nifty.com/wbsj-tochigi/shohin/accipiter/>



図書紹介

鳥類学

Frank B. Gill 著 山岸 哲(日本語監修), 山階鳥類研究所(翻訳) / 新樹社 定価5000円(税別)

日本の鳥学会は2年後の2012年に100周年を迎えるが、これまで日本では鳥類学の教科書が出ていなかった。そこで、アメリカのOrnithology(フランク・ギル)の翻訳である本書は日本語で読める初の本格的な鳥類学教科書となった。本書が基にしたのは、1990年代後半以降の新知見を取り入れて大幅な改定がされた第3版である。例えば、90年代後半に化石鳥類の発見が相次ぎ、中生代の鳥類について、また、分子生化学の進展に伴い、系統分類についても大きく見直された。

具体的には、第1部「起源」で、鳥類の多様性の特徴、大進化の歴史、系統分類がとりあげられ、第2部「形態と機能」には、羽毛、飛行、生理が扱われている。第3部「行動とコミュニケーション」では、感覚や脳・知性、発声などが、また第4部「行動と環境」では、年周期、渡りと航法、社会行動などが扱われる。第5部「鳥類の生活史」では、配偶や繁殖システム、性、営巣、子の世話、繁殖成功率など、

行動学や生態学の教科書でおなじみのテーマが鳥類の事例だけで語られる。第6部「個体群の動態と保全」では、個体群や種概念、また群集の動態や種多様性についてと、鳥類の現状や脅威、保全の実践などに触れられている。

このように、主な分野のテーマを網羅し、用語の定義と共に解説してあるのでわかりやすい。700頁を越える大冊だが、欧米の教科書の例に漏れず、各章末にはまとめがあり、さらに囲み記事に興味深いケーススタディを紹介してあるので、どこから読んでもさし支えない。これだけの内容を原書と同じお値段で、日本語で読めるのは幸いであろう。【黒沢令子】



シマフクロウ 英: Blakiston's Fish Owl 学: *Ketupa blakistoni*

1. 分類と形態

分類: フクロウ目 フクロウ科

全長: 660~685mm (n=7) 翼長: 482~527mm (n=8)
 露出嘴峰長: 33.1~38.0mm (n=9) 尾長: 260~289mm (n=8)
 ふ蹠長: 80.0~90.8mm (n=7)
 体重: ♂ 3,150~3,450g (n=3) ♀ 3,360~4,600g (n=4)
 ※以上計測値は山本(1999)による。

羽色:

雌雄同色。全体に灰褐色で発声時には喉の白色が際立つ。顔は体色よりやや濃い灰褐色。胸、腹、脇は、淡灰褐色。風切羽は濃褐色で淡褐色の横縞が9条ほど入る。雨覆は褐色で、各羽に黒褐色の幅広の軸斑と黄みがかかった淡赤錆色をした横斑を持つ。尾羽は褐色で、クリーム色の横帯が7~8条ある。※山本(1999)による。



写真1. シマフクロウ。

鳴き声:

成鳥つがいは、オスの「ボ、ボー」と重なり合うようにメスが「ボォー」と応える鳴き交わりを頻繁に行う。この低音の二重唱は1km以上の距離まで届く。ヒナは「ビエービエー」と腹から絞り出すような高い叫び声を響かせて餌をねだる。

2. 分布と生息環境

分布:

オホーツク海沿岸の北緯60度に位置するマガダンから日本海沿岸ウスリー川流域のロシア極東部、中国東北部、およびサハリン南部、南千島(クナシリおよびシコタン)、北海道に分布する留鳥である(図1)。総個体数は数百羽と見積もられているが(Collar 2001)、800羽以上との推定もある(Slaght & Surmach 2008)。国際自然保護連合(IUCN)のレッドリストでは Endangered (絶滅のおそれのある種)に指定されており(IUCN Species Survival Commission 2008)世界的に絶滅が危惧されている。



図1. シマフクロウの分布。

生息環境:

フクロウの仲間には珍しく魚類を主食とするため、生息環境は河川を中心とした水系から切り離せない。河川、湖沼、ときには海岸線で主に夜間に狩りを行い、川沿いの広葉樹林あるいは針広混交林を昼間のねぐらとする。分布域が寒冷地に限定されているため、冬季に凍結を免れる開水面の存在も彼らの生息にはきわめて重要である。

3. 生活史

繁殖システム: 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12月
 繁殖期 非繁殖期

一夫一妻で繁殖し、つがい関係は10年以上に及ぶことも珍しくない。周年で行動を共にし、伴侶の交替は、通常、夫(妻)の消失によっておこり、離婚は

稀と考えられる。ただし、山本(1999)は、オスの争いに伴う繁殖オスの入れ替わりを一例報告している。北海道においては、厳冬期の2月上旬に交尾を開始し、2月末から3月中旬に産卵を迎える。子育てにおける雌雄の分業は明確であり、抱卵、抱雛はすべてメスが担い、その間の狩りと獲物の巣への運搬はオスの役割である。巣内育雛期間の後半には雌雄ともにヒナへの給餌活動を分担する。

巣:

営巣には広葉樹の樹洞を利用するが、世界最大級のフクロウである彼らの子育てには、直径1mにおよぶ大木に形成される洞が必要である。北海道十勝地方での筆者の調査では、シナノキ、ミズナラ、カツラが営巣木として用いられていたが、根室地方ではさらにハルニレ、イタヤカエデとダケカンバが(山本1999)、知床半島の調査ではこれらに加えてオヒョウも報告されている(竹中1999)。ただし、営巣可能な広葉樹の大木は既に多くが伐採されているため、現在多くの個体が巣箱に頼って繁殖している。樹洞以外にも、トビの古巣と岩棚での営巣例も報告されている(山本1999)。

卵:

一腹卵数は2卵あるいは1卵。産卵間隔は2~5日。卵は白色で、長径55.9~69.4、短径49.0~52.8mm (n=23, 山本1999)。



写真2. 孵化後約50日のヒナ。

抱卵・育雛期間・巣立ち率:

35~38日の抱卵期間を経て、3月末から4月中旬にヒナが孵化する。十勝地方における一繁殖地の継続調査では、1989~2009年の21年間、毎年産卵が行われたが、孵化率は高くなく、10年間は孵化に至らなかった。孵化から約2週間は母親が抱雛を続ける。孵化から巣立ちまでの期間は通常48~60日だが、山本(1999)は69日間の事例を報告している。十勝地方の一繁殖地での調査では、孵化したヒナの巣立ち成功率は89%(1989~2009, n=18羽)であった。5月中旬から6月上旬の巣立ち後も両親による子の世話は続き、給餌は秋まで、ときには冬を迎えても観察される。

4. 食性と採食行動

海から遡上するカラフトマスやアメマスなどを待ち受け河川で捕獲する他、河川で生涯を過ごすオショロコマなども含めたサケ科魚類が主要な餌資源である(竹中1999, 山本1999)。加えて、ドジョウ、カジカ、ヤツメなども頻繁に捕食する。魚類に次いで重要な食料になるのはカエルやサンショウウオなどの両生類で、さらにカモなどの鳥類、ネズミやトガリネズミなどの小型哺乳類、ザリガニなどの甲殻類、まれには甲虫にいたるまで、餌動物は多岐にわたる。

5. 興味深い生態や行動、保護上の課題

● 分散・里帰りと近親交配

自立の準備が整った若鳥は、満1才あるいは2才の春に出生地から分散し新天地を求めますが、娘の中にはその後も

親元への帰省を繰り返す個体がいる。中には既に新たな生息地で夫と暮らしながら、5才になるまで冬季に里帰りを重ねた娘もいる。成熟した娘の存在を許容することから、両親は長期にわたり我が子を識別しているとも考えられる。

独身者の中には帰省したまま出生地に定着してしまう娘も現れる。たまたま母親が消失した直後に帰省した5才の娘が、そのまま出生地で父親とつがいを形成し、12年にわたって繁殖を続けた例もある(Hayashi 2009)。この娘には後の余罪もあり、父親消失後、入り込んできた孫とつがいになり、2回繁殖に成功している(Hayashi 2009)。また、年齢の異なる兄と妹が分散先で出会いつがいになる等、近親交配の発生は北海道のシマフクロウにとって今やそれほど珍しいことではなさそうだ。

● 個体群の衰退と保護

かつてシマフクロウは、札幌や函館、帯広を含む北海道ほぼ全域に広く分布していたことが標本等の資料より明らかになっているが(早矢仕 1999)、とくに高度経済成長期の森林伐採と河川環境の改変、人工孵化事業による遡上サケマスの捕獲に伴い、主食と営巣木を含めた生息環境を失い、個体数と分布を衰退させ続けてきた。現在では北海道東部を中心に約35つがいが繁殖しているにすぎず、日本国内のレッドデータブックでは、ごく近い将来に絶滅の危険性がきわめて高い「絶滅危惧 I A類(CR)」に指定されている(環境省自然環境局野生課 2002)。

1984年以降、①給餌池による繁殖つがいへの人為給餌、②巣箱設置、③個体識別のための巣立ちヒナへの足環装着、の三事業を中心とした国による保護事業が継続されてきた。これらの保護事業は地道だが着実な成果を上げ、設置された巣箱は200個を超え、事業開始当初から給餌事業の対象となった根室や十勝の生息地は、安定した雛生産の拠点となっている。ヒナの高い巣立ち成功率は、安全な巣箱と人為給餌による豊富な餌資源に支えられおり、たとえば、人為給餌が実施されている十勝地方の生息地では、一羽のヒナの孵化から巣立ちまでに両親が巣に運んだ総給餌回数470回のうち約半数が人為給餌された魚であり、重量では9割以上を占めた(図2)。人為給餌に強く依存している生息地では、天然の魚類生息密度がきわめて低いことが報告されており(竹中 1999)、今や人為給餌なしに次世代の生産は不可能と言っても過言ではない。

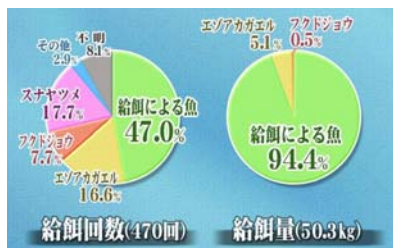


図2. ある1羽のヒナが巣立ちまでにもらった給餌内容。

● 保護上の課題

給餌や巣箱設置による応急処置が功を奏する一方で、生息環境の保全は常に立ち後れてきた。近親交配の頻発は、現繁殖地のみならず豊富な餌が提供され周囲に生息適地が残されていない現状と無縁ではないだろう。シマフクロウ

生息地の大半が属する国有林では、広葉樹の伐採を止め、針葉樹の造林地を針広混交林へ復元を試みるなど生息環境復元を目指しているが(早矢仕 2009a)、ごく一部の生息地に限定されている。北海道の原生的森林の象徴的存在であったコタンコロカムイの住まいを復元する努力は、さらなる発展が強く望まれる。

個体群の増加と分布の拡大を妨げている要因として、特に若鳥の交通事故や感電事故による死亡もあげられる(早矢仕 1999, 齊藤 2002)。道路や電柱への事故防止対策に加えて、出生地からの分散を安全に誘導する河川沿いの森林を復元することも、事故発生の抑制に貢献する。事故の負傷から快復した個体を単独個体の生息地あるいは過去の生息地へ導入することで、分布域復元を目指すことも可能となる(早矢仕 2009b)。このような人為的移動に関しては、動物園で生まれた個体の活用も視野に入れた長期的戦略が求められる。一度は飼育下においた個体の野生復帰の取り組みを生息環境復元と併せて実施していくことが、シマフクロウ保護の直近の課題であろう。

6. 引用・参考文献

Collar, N.J. (ed.). 2001. Threatened birds of Asia: the BirdLife International red data book. BirdLife International, Cambridge, U.K.
 早矢仕有子. 1999. 北海道におけるシマフクロウの分布の変遷 —主に標本資料からの推察—. 山階鳥類研究所研究報告 31:45-61.
 Hayashi, Y. 2009. Close inbreeding in Blakiston's Fish-owls (*Ketupa blakistoni*). J. Raptor Res. 43:145-148.
 早矢仕有子. 2009a. 生息地保全が大切ではないか? —シマフクロウ—. 「日本の希少鳥類を守る」(山岸 哲, 編著)pp. 75-98, 京都大学出版会, 京都.
 早矢仕有子. 2009b. 北海道北部へのシマフクロウの人為的移動. 保全生態学研究 14: 249-261.
 IUCN Species Survival Commission. 2008. The IUCN Red List of Threatened Species 2008. <http://www.iucnredlist.org>
 環境省自然環境局野生生物課. 2002. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック— 2. 鳥類. 自然環境研究センター, 東京.
 齊藤慶輔. 2002. シマフクロウ (*Ketupa blakistoni*) の交通事故 —野生動物医学的考察—. 第1回 野生生物と交通研究発表会: 27-30.
 Slaght, J.C. & Surmach, S.G.. 2008. Biology and conservation of Blakiston's Fish-Owls (*Ketupa blakistoni*) in Russia: a review of the primary literature and an assessment of the secondary literature. J. Raptor Res. 42:29-37.
 竹中健. 1999. シマフクロウ. 「しれとこライブラリー①知床の鳥類」. (斜里町知床博物館, 編)pp. 78-125, 北海道新聞社, 札幌.
 山本純郎. 1999. シマフクロウ. 北海道新聞社, 札幌.

執筆者

早矢仕有子 札幌大学法学部

北海道から遠く離れたニュージーランドで一年半を過ごした間もシマフクロウへの惜別の情は癒しがたく(?), 3度も帰国する羽目になりました。これからずっと片思いのご奉公を重ねるのかなと、我が身の幸運(!)をヒシヒシと感じています。



レポート

続 カワウのとまり場
～杭はおとなの世界～

高木 憲太郎

加藤さんと嶋さんが姉崎海岸にあるねぐらで、標識されたカワウを対象に、そのとまり場所を調査した結果が、2009年10月号のニューズレターで紹介されています。その調査によるとカワウのとまり場所は、個体ごとに決まった席があるということでした。昨年(2008年)の10月と12月に東京港野鳥公園のカワウのねぐらを調査していたところ、とまり場所についてちょっとした発見があったので、ご紹介したいと思います。



写真. 東京港野鳥公園のカワウのねぐら。杭の上(橙)と樹上(緑)にねぐらがある。写真(下)の島の上に並んでいるのは、ほとんどがねぐら入り前のカワウ。

東京港野鳥公園のカワウのねぐらは、以前は、潮入りの池という名前がついた満潮時には海水が入る池の中に立っている杭の上にだけありまし

た(写真 上)。しかし、ここ数年で池のほとりの樹木の上にも多数のカワウがねぐらをとるようになってきています。さて、今回の調査はたった2回の調査です。東京港野鳥公園でも足環で標識されたカワウが観察されますが、姉崎海岸で行なわれたような調査はできません。しかし、カワウは生後1歳を迎えたあと最初の換羽(8月頃)までは、胸が白いなど羽色に成鳥とは違う特徴が見られます。そこで、杭の上と樹上でカワウの成鳥羽と若鳥羽の比率を比較してみました。すると、10月も12月も杭の上は成鳥が独占していて、若鳥はほとんどとまっていませんでした(図)。杭の上の方が樹上よりも安全なので好まれていて、成鳥のほうが優位だから独占できるのでしょうか？それとも樹上にねぐらができる前からいたカワウが、自分の指定席を確保し続けているからでしょうか？理由はわかりませんが、こうも綺麗にわかれるものかと、びっくりしました。コロニーでも繁殖状況などを調べる時は、コロニーの一部ではなく、全体からまんべんなくサンプリングして調査しないと、偏った結果になってしまうかもしれません。気をつけな

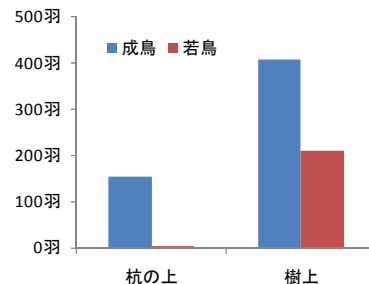


図. 10月のカワウの成鳥と若鳥のとまっていた場所の比較。杭の上は成鳥がほぼ独占している。12月は総個体数が1/4程度と少なかったが、同じ結果だった。日没1時間前ごろの調査なので、ねぐら入り個体数全体を調べているわけではない。

研究誌 Bird Research よい

高知市でのバライロムクドリの記録の論文が受理になり、本日掲載されました。

佐藤重穂・高橋 徹・小林靖英・橋田晃浩. 2010. 高知市におけるバライロムクドリの越冬事例.
Bird Research 6: S1-S6.

四国ではじめて越冬したバライロムクドリの記録についての論文が受理されました。論文内で過去の記録もまとめられていますが、そのほとんどは2000年以降のもので、バライロムクドリのいる可能性から、いままで見向きもされな

かったムクドリの群れが注目して見られるようになったなどということもあるかもしれませんが、バライロムクドリの分布が変化しているのかもしれない。今後の動向に注目したいと思います。

【植田睦之】



写真. 高知市高須で2009年5月3日に撮影されたバライロムクドリ。 [Photo by 橋田晃浩]

バードリサーチニュース 2010年2月号 Vol.7 No.2

2010年2月18日発行

発行元: 特定非営利活動法人 バードリサーチ
〒183-0034 東京都府中市住吉町1-29-9
TEL & FAX 042-401-8661
E-mail: br@bird-research.jp

URL: <http://www.bird-research.jp>

発行者: 植田睦之

編集者: 高木憲太郎

表紙の写真: ハクガン